



のと海洋ふれあいセンターだより

の と かい ちゅう りん 能 登 の 海 中 林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No. 26. Mar. 2007



能登半島西方の^{しんかい}深海から見つかったノトシンカイクシエラガイ(新称)^{しんしょう}(6ページ参照)

<目次>

石川県沿海の水温について	又野康男 ...2
スノーケリング事業における参加者の声	福島広行 ...4
能登半島西方の深海から見つかったノトシンカイクシエラガイ(新称)	平野義明・坂井恵一・福島広行 ...6
トピックス	7
センター誌抄と観察路だより	8

平成19年3月

石川県沿海の水温について

又野 康男

のと海洋ふれあいセンターでは能登町小木沖の深層水取水地点と同じような水深層に生息する動物を平成18年4月から展示したところ、来館された皆さんはオキノテヅルモツルやザラビクニン等、口にするのもどかしいような名前や日頃あまり目にふれることのない珍しい形態の動物に目を見張ると同時に展示水槽の海水のあまりの冷たさに驚きの声を上げ、思わぬ反響をいただきました。そこで石川県沿海の海水温について他の海域とも比較しながらご紹介します。

沿海表層水温の季節変化

図1は石川県(九十九湾地先)、北海道(余市)、広島県(音戸)、沖縄県(本部)の地先の月平均水温の変動を示したものです。各月とも沖縄県で最も高く、北海道で最も低くなっています。いずれの地先も最高水温期は8月、最低水温期は2月となっています。1年間の月平均最高水温と最低水温の差(便宜的に年較差とします)は、沖縄県で8.6(20.0~28.6)で最も小さく、北海道で16.9(5.4~22.3)、そして石川県は意外にも温暖な気候で知られる瀬戸内海に面している広島県(9.7~25.4)と最高、最低水温がほぼ同じで、年較差は17.4(9.4~26.8)で、最も大きくなっています。

この表層水の年較差が大きいことは生物の生息に様々な影響を及ぼします。例えば魚介類の多くは生息に適した水温を求めて回遊するため、季節ごとに水温が大きく変化する石川県沿岸には、多種多様の魚介類が来遊します。そして日本の漁業の縮図と言っても過言ではない石川県の多彩な漁業とも相俟って、のと海洋ふれあいセンターにほど近い石川県漁業協同組合能都支所地方卸売市場に水揚げされた魚類は300種以上を数え、四季それぞれに県民の食卓を大いに賑わせてくれています。

しかし、魚の行動を網生簀等で制御して自由に移動させない養殖には大きな弊害をもたらしま

す。例えばブリは幼魚(モジャコ)から1kgの大きさ(フクラギ)に成長させるためには石川県では、5月頃から12月頃までの8ヶ月間を要します。特に11月以降は水温が20以下となるため、餌を食べさせても餌料効率が低く、暖かい海で養殖しているブリと比べると成長が不良で養殖業としては不利になります。

また東北地方などで養殖されているギンザケは低水温下で斃死が少なく成長も良好ですが、石川県でギンザケの養殖が可能な期間は水温が20以下の11月頃から5月頃までのため、商品として出荷できる大きさまでに成長させることが大変困難です。このように石川県沿海の冬季の低水温は暖海性魚類の養殖において、また夏季の高水温は冷水性魚類の養殖において成長や生残を大きく阻害する要因となっているのです。

沖合域水温の鉛直的な季節変化

水温の鉛直的な季節変化を能登半島に位置する輪島市の北北西沖約70kmの地点の水温を例に図2に示しました。



オキノテヅルモツル(左)とザラビクニン(右)

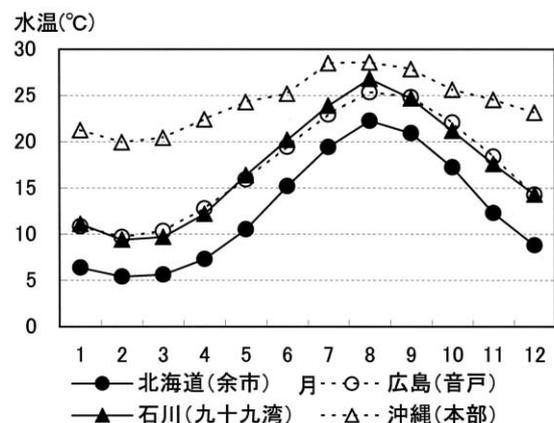


図1 各道県の沿海表層水温の季節変化

水温が次第に上昇し始める5月は表層から水深75m辺りまでは表層ほど水温が高いですが、その差は少なく緩やかな温度勾配となっています。水深100m層から200m層に掛けては水深が深いほど低く、水温降下は急激になっています。水深250m層以下では再び水深が深くなるに伴って降下する水温の幅は少なくなっています。水深300m層では約0.9℃となっている。

8月になると水深250m層までは水深が深いほど急激に水温が降下し、成層を形成して上層の海水と下層の海水が容易には交わらない安定的な構造が見えます。このような成層は水温の下降期である10月頃から次第に不安定になります。

11月には50m層までは表層の水温とほぼ同じで、鉛直混合が緩やかに行われています。75m層から200m層までは8月と同様に水深が深くなるに従って水温が急激に降下しています。250m層以深はほぼ8月と同様の水温を示しています。鉛直混合はその後、月を経るに従って混合域を深め、2月では水深150m層までが表層の水温とほぼ等しい水温を示します。250m層以深は8月と同様の水温を示します。

年間の各水深層の水温範囲は、0m層が10～25℃、50m層が10～21℃、100m層が9～15℃、200m層が2～8℃、250m層が1～4℃、300m層が0～2℃、400m層が0～1℃、500m層が0℃となっています。つまり水深層が深くなるに従って年較差は小さくなり、特に300m以深は季節的な変化は極めて小さくなっています。

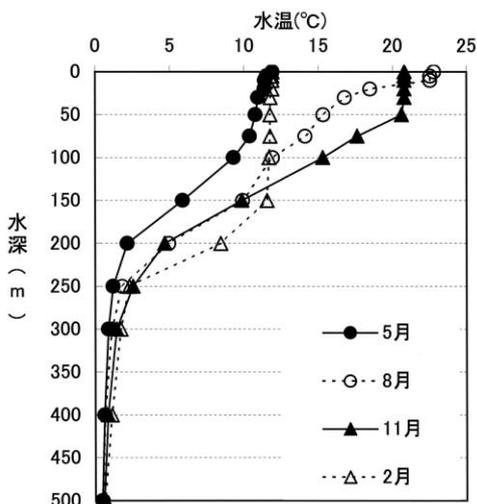


図2 水温鉛直分布の季節変化(石川県)

一方、太平洋側の静岡県駿河湾を例にみますと、水深300m層では1年を通じて7～13℃、400m層では7～8℃、500m層では5～6℃、600m層では5℃、700m層では4～5℃で、季節的な水温変化が極めて小さいのは水深400m以深です。

従って石川県沖合では季節的な水温変化が極めて小さい水深層は駿河湾より約100m浅くなっています。また図3に示すように同じ水深層の水温は石川県輪島市沖合のほうが静岡県駿河湾より低くなっています。

これは日本海に流入する対馬海流と太平洋に流入する黒潮の規模(流域の幅や流域の厚さ)等の違いが影響していると考えられます。

ところで冒頭で深層水の水温を再現している水槽の海水の冷たさに来館者の皆様が驚かれたと述べましたが、展示水槽の水温は300m層の水温とほぼ等しい約0℃に設定されていたというわけです。来館者の皆様に水槽の水温は何度だと思えますかとお尋ねしたところ、5～10℃の範囲のお答えが多く、0℃という水温はなかなか想像し難かったようです。(館長)

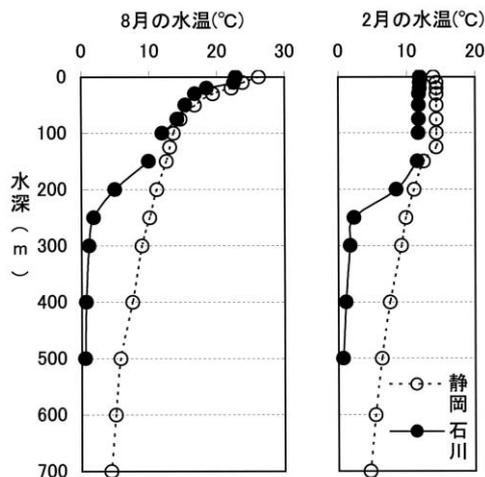


図3 石川県と静岡県の水温鉛直分布

参考文献

石川県水産総合センター,1999:石川県水産総合センター研究報告第2号
 石川県水産総合センター,2006:平成16年度新漁業管理制度推進情報提供事業報告書
 沖縄県栽培漁業センター,2005:取水井戸水温観測資料
 静岡県水産試験場,2005:平成15年度漁況海況予報関係事業結果報告書
 のと海洋ふれあいセンター,2005:九十九湾地先観測資料
 広島県水産試験場,2005:広島県水産試験場事業報告2004年度
 北海道立中央水産試験場,2006:2005年の旬平均水温(HP)

スノーケリング事業における参加者の声

福島 広行

当センターでは、スノーケリングの基礎的な技術を学び、磯の生きものを直接見たりふれたりする「スノーケリング事業」を平成7年度から行っています。

参加者の声を紹介する前に、簡単に事業の流れを紹介します。まず、海の自然体験館でオリエンテーションを行います。使用する器材の紹介とその装着方法、その日見られるであろう生きものや危険な生きものなどをスライドを使って解説します。その後、5~6人を自途にグループ分けをし、リーダー（フィールドで指導する人＝指導者）が加わりグループごとに自己紹介をかねたミーティングを行います。そして、水着に着替え、器材を選び、装着してフィールドへ向かいます。

フィールドでは、ウェットスーツの浮力を「ラッコのポーズ」で体感してもらってから、マスククリアーやスノーケルクリアー、足ヒレの使い方など、基本的な技術の指導を行います。これらを一通りマスター出来た段階で、磯観察方法の指導を行います。そこでは、リーダーがポイントを移動しながら様々な生きものを見つけるたびに、指差したり捕まえたりしながら名前や生態などについて解説します。ポイントを一通り回り終えると海の自然体験館に戻り、器材を片付けて着替えをします。その後、その日の体験をふりかえりながら、アンケート用紙に「思ったことや気づいたこと」などを記入してもらいます。

これまでの記入内容には、「とても楽しかった」、「貴重な体験が出来た」、「来年も参加したい」など、大変ありがたい意見が多く書かれています。また、職員からの助言もあって、自分が観



基礎技術指導の様子（ラッコのポーズ）

察した生きもの名前や絵を書かれる方も多くいます。短時間のうちに描かれた絵でも、その生きものの特徴がよく捉えられていて、鋭い観察力に驚かされます。

一方、「持ち物は何か必要か事前に知らせて欲しかった」、「乾いていない器材を身に付けるのは気持ち悪かった」、「フィールドでの解説が不十分だった」など、謙虚に受け止めなければならない意見も見受けられます。こうした意見に対しは、その場限りの反省で済ませるのではなく、次回へと反映させる事が大切だと考えます。

今後も、「参加者の声」を活かしつつ、事前案内の充実や、器材管理手法の検討、さらには高いスキルを持つリーダーの養成などに取り組み、より質の高い事業の提供に努めたいと思います。

以下に、今年度の「参加者の声」の一部を紹介します。

7月22日(土) 午前の部

ここまでの道のりが遠く、「計画は取り止め」という気持ち。しかし、体験して、「又、家族と」という思いになりました。料金も安く、本当に時限の違う経験、本当にありがとうございました。体験して始めて楽しみがわかることがわかりました。体験しないとダメ。

7月23日(日) 午前の部

めちゃ楽しかった。もうちょっと沖の方まで行きたかった。名前は忘れたけど、いろんな魚見れて嬉しかった。1つずつ魚とか見てさわりたいし、説明あったら、Good。ウスユキウチワ見たよ。時間ももっとほしいな。

7月29日(土) 午後の部

今日、初めてスノーケリングをしてこわかったのがぜんぜんなくなりました。あとアオウミウシやシロウミウシやミズクラゲをたくさん見れてよかったです。ムラサキウニを初めて見ました。スノーケリングは楽しいのがよく分かったので、どんどんしたいです。魚もたくさんいたすごいむれもいました。1回目でこんなにじょうずになれてとてもいい経験だなと思いました。また、どんどんきたいです。

7月30日(日) 午前の部

今日は海のいろんな生き物を見ることができてとても楽しかった！海がとてもきれいだった。今日見れたもの、キヌバリ、チャガラ、クジメ、ホンベラ、キュウセン、クサフグ、イシダイ、アメフラシ、ムツサング、アオウミウシ、シロウミウシ、etc・・・ミズクラゲがいっぱいいて、少しびっくりしたけど、水色に光ってみえてきれいだった。ネオン色に光る海そうもきれいだった。



8月5日(土) 午前の部

初めて海にもぐって、今までに見たことのない魚が見れて、感動した。「ウミウシっていうのがある」とは知っていたけれど、実際に見て・・・カワイかった(笑)。また機会があったらやりたいと思います。

8月6日(日) 午前の部

魚とかウニがたくさんいました。とてもきれいだったです。海水はあたりまえにしょっぱかった。とても楽しかったです。

8月13日(日) 午前の部

器材等の問題で、個人では楽しむ機会の少ないスノーケリングを安価に安全に体験でき、喜んでおります。通勤族のため、北陸に居る期間も限られますが、存分に石川の自然を楽しみたいと思います。親子のバディで九十九湾の海を潜る事が出来るよう、また体験に来たいと思います。

8月19日(土) 午前の部

今日は、初めて本格的なスノーケリングを経験でき大変有意義でした。観察できた魚は、ホンベラ、イシダイ、オヤビッチャ、アオリイカ等たくさんのもが見れました。あと、パフンウニ、アオウミウシ、シロウミウシ、ミズクラゲ、ムツサング、シロガヤ等も観察でき、今日は透明度が悪い方だということでしたが、私としては十分スノ

ーケリングを楽しむことができました。できましたら、スノーケリング前の説明に動植物の説明を詳しくやっていただけたらと思いました。全体としては、思った以上満足できる内容でした。スタッフの皆様ありがとうございました。来年は、家族全員で参加したいと思います。

8月20日(日) 午前の部

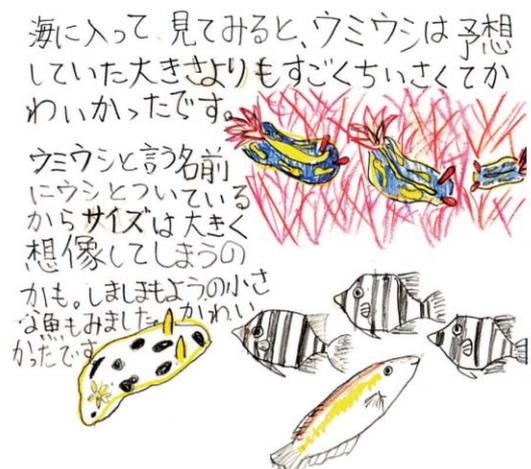
久しぶりに海で泳いだのでかなりつかれました。波の抵抗ってすごい。でも海の中はキレイで、泳いでいる魚をまじかで見て感動しました。フグがかわいかった。ただ、クラゲに気を取られて大変でした。そっちに集中してたかも知れません。

8月26日(土) 午後の部

とても楽しくて面白かったです。魚や動物その他が自分の目で間近に見れて感激しました。普段、プールや海では自分の背が立たない深いところには行かないのですが、今日はスーツを着て、先生もついてくれていたので安心して泳げました。水族館の水そうの中で泳いでいる魚やクラゲを見るのと海の中で自分の目で見るのとは全く感じが違いました。あっという間に体験の時間が終わってしまっさんねんて残念なくらいでした。今日は、本当に、本当に有難うございました。海にとっても親しみを感じることができました。スタッフの方の説明や指導もとても親切でよかったです。

8月27日(日) 午後の部

海には生物がいっぱいでした。はじめは深くて足がつかない所は恐かったけれど、慣れると逆に浅い所に危険な生物がいるのではないかと恐くなった。しかしスーツがちゃんと浮いてくれるので深い所も安心して行けるようになった。海はきれいでとても楽しかった。今度は、少し深い所にももくれるようになりたい。ウミウシが意外と小さくておどろいた。危険生物が初めに紹介されたけど、実際の大きさにギャップがあり、発見しにくかった。
(普及課 専門員)



能登半島西方の深海から見つかった ノトシンカイフシエラガイ(新称)

平野 義明・坂井 恵一・福島 広行

能登半島の西方、水深およそ250mの深海から新しいウミウシの仲間が採集されました。志賀町西海風戸にある石川県漁業協同組合とぎ支所の第二永宝丸、三井一雄氏が平成18年3月上旬に能登であまえび(ホッコクアカカエビ)やしまえび(モロトゲアカエビ)と呼ばれている深海性のエビ類をねらったカゴ網漁の混獲物の中から見つけました。採集された場所は底引網漁ができないような大きな石や岩からなる海底だと思われます。飼育観察により、このウミウシがオキアミを食べることも分かりました。

このウミウシは頭部の前端に2本の触角をもっています(表紙写真)。触角は互いに接近しており、これらの特徴から、背楯目の中でも、とくにカメノコフシエラガイ科カメノコフシエラガイ亜科に分類されるものであることがわかります。また、体の右側面、背中をおおう外套と足の間にある鰓の中央部分が滑らかなことから、シロフシエラガイ族の一員であることがわかりました。シロフシエラガイ族には、シロフシエラガイ属やホウズキフシエラガイ属などがあります。

赤みを帯びた比較的滑らかな背中(外套)は、一見、ホウズキフシエラガイに似ていますが、このウミウシの体はホウズキフシエラガイよりずっと大きく、また、堅いので、ホウズキフシエラガイではないだろうと思いました。そこで、歯舌と呼ばれる摂餌器官の形態を観察したところ(写真1)、歯はゆるやかに彎曲しただけの単純な形で鋸歯状の刻みがないため、ホウズキフシエラガイ属の種ではなく、むしろシロフシエラガイ属に近いことがわかりました。しかし、シロフシエラガイやチギレフシエラガイなど、日本産のシロフシエラガイ属の種の歯と比べると、より細長い歯です。さらに、歯舌の近くにあつて、やはり摂餌に用いられる顎板の形態も少し異なることがわかりました。顎板には小鱗歯と呼ばれる微細構造がたくさん並んでいます。このウミウシの小鱗歯(写真2)は、とても細長く、中央付近にほんの少し横に張り出したところがあるだけで、シロフシエラガイやチギレフシエラガイではそれらは太く短く、横への張り出しもずっと顕著です。したがっ

て、このウミウシは、これまで日本から報告されている種のどれでもないことがわかりました。

さらに、私たちが驚いたのは貝殻の様子でした。カメノコフシエラガイ亜科の種の多くは、体の中に退化した貝殻をかくしもっています。ほとんどの種の貝殻はふつうの巻貝がもつ貝殻よりは薄いものの、それなりに堅く貝殻だとわかるものです。しかし、このウミウシの貝殻はとても薄くべらべらで、すぐ破れてしまい、一見、膜のようにしか見えません。このようなとても薄い貝殻をもつ種はシロフシエラガイ属にはいません。世界でも数属数種に知られているだけのとても珍しいものです。体の中のいろいろな器官の構造を詳しく調べてからでないと、このウミウシに正式な名前をつけることはできませんが、水深約250mの深い海から採れたことにちなんで、ノトシンカイフシエラガイと呼びたいと思います。

平野(千葉大学理学部)

坂井・福島(のと海洋ふれあいセンター)

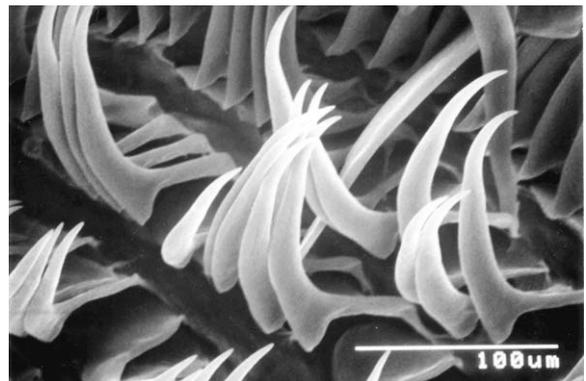


写真1 歯舌の形態(電子顕微鏡写真)



写真2 小鱗歯と呼ばれる顎板の微細構造(電子顕微鏡写真)

トピックス

ウマツラハギのメスとオス

坂井 恵一

ウマツラハギは能登でも重要な食用魚で、主に富山湾沿岸に仕掛けられた大小の定置網で漁獲されます。安価で美味しい、大変身近な魚です。

能登ではこの魚をばくちだいやばくちこきと呼びます。厚くザラザラした皮で全身がおおわれているため、まずこの皮を剥がなければ料理に使えません。先人はこの皮を剥がれた様を「博打(かけごと)で大負けし、お金だけでなく着物までも奪われた様」に例え、こう呼んだのでしょう。

平成17年11月、石川県水産総合センターの辻 俊宏さんが体長約30cmを超えたウマツラハギの中に体高が低く、吻(眼から口までの部分)が長くて丸くなるものが混じっていることに気がつきました。そこでさまざまな体長の標本を集め、詳しく観察することにしました。その結果、体長が22cm以上になるとオスはメスよりも体高が低くなり、吻が丸く膨れ上がることが分かりました。ただし、オスの吻部の変形は体長が約17cmを越える頃から始まり、

骨の変形が原因であることも分かりました。

身近な魚のウマツラハギ、その雌雄でこんな体型の違いがあることを知り、改めて魚の奥深さを感じています。詳細はのと海洋ふれあいセンター研究報告(No.12)で報告しました。(普及課長)

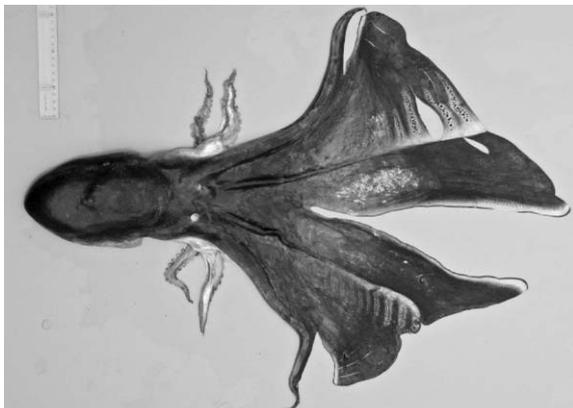


ウマツラハギのメス(上NMCI P.1750, 27.4cm)とオス(下 NMCI P1749, 27.3cm)

漂着した生きものたち

東出 幸真

今年のはと海洋ふれあいセンター周辺で、軟体動物の頭足類(イカ・タコのなかま)の漂着が相次ぎました。まず、9月28日にアオイガイ、翌29日にはムラサキダコが磯の観察路に漂着しました。両種ともに元々南の暖かい海に生息する生きものなので、対馬海流に乗ってやってきて磯へ漂着したのでしょうか。県内では秋から冬にかけて漂着すること



漂着したムラサキダコのメス(NMCI M.839)

が知られていますが、彼らが磯の観察路で見つかったのはセンターが開館して以来、初めてです。

アオイガイのメスは葵の葉のような形の殻を作ってその中に卵を産み、孵化まで守り育てます。漂着したアオイガイの殻の中にもたくさんの卵が入っていて、一部は孵化して赤ちゃんが泳ぎ始めていました。漂着したムラサキダコは全長約70cm、腕と腕との間に膜があるのが特徴です。この膜は腕の方向と垂直に裂けやすく、発見当初、裂けた膜は細い紐のようになって体全体に絡み付いていました。

珍しい種類に限らず、身近な生きものでも生態の良く分かっていないものが多いので、生きている場合は飼育して観察し、死んでしまった場合でも標本にして大切に保管し、いつでも調べられるようにすることが必要だと考えています。もし海岸で見たことのない生きものを見つけたら、面白い行動を目にしたら、ぜひ、ご一報をお願いいたします。

(主任技師)

2006(H18)年後期(7~12月)

- 7/1-2 スノーケリング指導者研修会を開催 8名受講、磯の生きものに関する講義と指導方法の実施
- 7/4-7 わく・ワーク(Work)体験学習で松波中学校2年生の中野翔太・木本一気・坂上裕亮・千原貴吉君が職場体験を実施
- 7/15 荒天(豪雨)のため磯の自然観察会「海のお花見」を中止
- 7/22 体験スノーケリングを開催 午前5名、午後7名参加
- 7/23 体験スノーケリングを開催 午前8名、午後5名参加
- 7/23 NHK金沢 スノーケリングの取材に協力
- 7/25-26 県民ふれあい公社主催「スノーケリング-海の不思議を覗いてみよう!-」が開催される 3名参加
- 7/29 体験スノーケリングを開催 午前14名、午後15名参加
- 7/29 能登町主催「スノーケリングスクール」が開催される 参加者2名、指導は海もぐら1名が担当
- テレビ金沢 じゃんサタ中継に協力
- 7/30 体験スノーケリングを開催 午前14名、午後6名参加
- 8/1 県立小松高校理科44名が臨海実習を実施
- 8/2 NHK金沢・県庁広報公聴室の取材に協力
- 8/4 ボーイスカウト一宮第5団の団員11名を対象にスノーケリング教室を開催 海もぐら2名が指導に協力
- 石川テレビの取材に協力
- 8/5 体験スノーケリングを開催 午前19名
- 8/6 皇太子殿下のご視察を受ける(詳細は前号)
- 体験スノーケリングを開催 午前24名
- 8/8 能登町主催「06夏 能登の自然体験学習ツアー」の塩作り体験に協力、横井将大主事を派遣
- テレビ金沢の取材に協力
- 8/12 荒天のため体験スノーケリングを中止
- 8/13 体験スノーケリングを開催 午前32名、午後20名参加

- 8/19 体験スノーケリングを開催 午前12名、午後20名参加
- 8/20 体験スノーケリングを開催 午前10名、午後8名参加
- 8/22-23 独立行政法人 国立科学博物館 昭和記念筑波研究資料館の並河 洋主任研究員、筑波大学大学院生命環境科学研究科の宮本教生院生の2名がギギシムシ類の採集のため来館
- 8/22-23 県民ふれあい公社主催「スノーケリング-海の不思議を覗いてみよう!-」が開催される 2名参加
- 8/26 体験スノーケリングを開催 午前5名、午後21名参加
- 8/27 体験スノーケリングを開催 午前6名、午後8名参加
- 能登町主催「スノーケリングスクール」が開催される 指導は海もぐら2名が担当
- 8/29-30 県民ふれあい公社主催「スノーケリング-海の不思議を覗いてみよう!-」が開催される 2名参加
- 8/30-31 星陵高等学校3年Pコース生徒と引率教員の計79名を対象にスノーケリング教室と磯の観察会を開催 海もぐら3名が指導に協力
- 9/2-3 スノーケリング指導者講習会を開催 23名受講 磯の海藻と動物の分類に関する講義、採集の実施とそれら生物と分類
- 鳥取県立博物館 山陰海岸学習館の和田年史氏と永田理雄氏が視察のため来館
- 9/7 金沢大学理学部の15名が臨海実習のため来館、講師として坂井恵一普及課長を派遣
- 海の体験学習会「タコを調べよう」を開催 9名参加
- 10/21 磯の自然観察会「磯の魚つり」を開催 4名参加
- 10/30 能登の海中林 第25号発行
- 11/18 海の体験学習会「魚の形を調べよう」を開催 10名参加
- 12/16 海の体験学習会「貝殻でリースを作ろう」を開催 5名参加

観察路だより

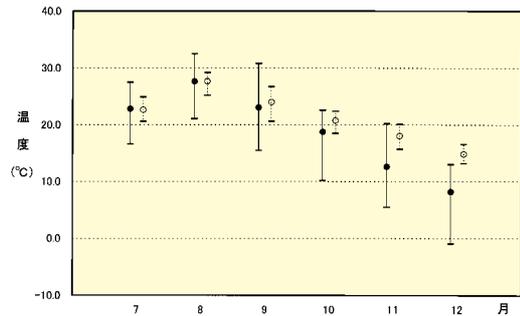
今年の夏は、「体験スノーケリング」を昨年の8回から24回に増やして開催したり、皇太子殿下の御視察を仰いだりと、毎日が慌ただしく過ぎていきました。

そんな夏が過ぎ、秋ともなると台風や低気圧の影響による大シケの日が多くなってきました。「冬の日本海」というと荒波押し寄せ荒々しい姿を思い浮かべる方が多いと思いますが、それは外浦海岸に限っての事で、ここ内浦海岸では、冬でも定置網などの漁業が盛んに行われる比較的穏やかな海域なのです。

しかし、昨年来から少し様子が変わってきました。というのも、日本海で台風並みの勢力に発達する「冬台風」とか「爆弾低気圧」などと呼ばれる低気圧が、昨年暮れからその勢力が特に強くなっているように感じられます。屋外タッチフィールドでは高波による土砂の流出やプール内への漂着ゴミの流入などの被害が頻発するようになりました。今年も数回の被害があり、特に1月7日から8日にかけては、高波がボードウォークを超えてフィールド内に押し寄せ、土砂が流出したのはもちろん、海との仕切り板がさらわれる等の被害が起こりました。また、開館当初に設置したセンター下の飛石が初めて壊されるなど、冬の低気圧が侮れない状況になっています。

このような被害を目の当たりにし、改めて海の恐さを思い知らされます。

(H.F)



2006年7月から12月の気温と水温の月変化
 気温：午前9時に観測した月別平均値 ()
 実線は月別の最高・最低気温の範囲を示す
 水温：午前9時に観測した月別平均値 ()
 破線は月別の最高・最低水温の範囲を示す

のと海洋ふれあいセンターだより 「能登の海中林」
 通巻第26号 平成19年3月23日 発行
 編集発行 のと海洋ふれあいセンター
 住所 石川県鳳珠郡能登町字越坂3-47 (〒927-0552)
 TEL 0768(74)919(代) FAX 0768(74)1920
 URL: <http://www.pref.ishikawa.jp/nmc/index.html>
 E-mail: nmci@pref.ishikawa.jp

のと海洋ふれあいセンター

設置者：石川県(環境安全部自然保護課) 管理運営：石川県県民ふれあい公社
 入場料：個人は高校生以上200円、団体(20名以上)160円、中学生以下は無料
 開館時間：午前9時~午後5時(但し、入館は午後4時30分まで)
 休館日：毎週月曜日(国民の祝日を除く)と年末年始(12月29日~1月3日)